

兵庫県猪名川町で宝もの探し

法西 浩 (武庫川づくりと流域連携を進める会・ひとほく地域研究員)

1. はじめに

2～3年前になるが、猪名川町内馬場(図1)でオサムシの調査をしていた。ここには図1に示すように、能勢電鉄日生中央駅から北へ30～40分のところ、里山の3箇所(1)の谷間がある。その1箇所(1)で、緑色に輝く小石を見つけた。当時は何も気にならなかった。2019年秋、この小石が有用な鉱物に思えてきた。そこでこの鉱物のある場所を訪れたい、と思った。これが猪名川町での「宝もの」探しの始まりである。

2. 地質概要

調査地点は兵庫県川辺郡猪名川町東部に位置し、2万5千分1の地形図「妙見山」の南西部(図1)である。一帯には超丹波帯の堆積岩類が分布し、西方には断層を境にして丹波帯の火山岩類が分布している。

3. 調査の概要と成果

トレッキングシューズで軽登山の服装で、手袋・ゴーグル・タガネ・ハンマー・ルーペ・カメラ・メモ用紙を準備した。

2019年10月20日(日)晴、ここを訪れた。谷の入り口からすぐの所に、緑色の石(写真1の矢印)数個を見つけた。さらに進むと、白い岩石と鉱石と思われる黒褐色の巨岩(写真2)が道端に落ちていた。谷の上部、急勾配になる所で、崩落した堆積物が見られた(写真3)。手に持てる鉱物数点を採集した。さらに、11月3日にもここを訪れ、鉱物10数点を採集した。その1部を、兵庫県立人と自然の博物館(以下人博)に同定をお願いした。

4. 鉱物標本の同定

人博からの同定の返事では、白い石は石英で、その中に自形結晶(水晶)が見られる(写真4)。石英の中にある「グリーン(緑)の斑点」は「銅の二次鉱物」だった(写真5)。お届けしていない鉱物では、写真4とほぼ同体積で、ずっと重く、2倍近い比重の黄褐色の銅鉱物(写真6)、同じく黒褐色の銅鉱物(写真7)を保管している。写真6、7の鉱物はそれぞれ「黄銅鉱」と「斑銅鉱」と思われるが、未同定である。


5. 考察と展望

猪名川町内馬場と多田銀銅山との関連を知りたくなったので、11月17日に猪名川町多田の悠久の館を訪れた。悠久の館は歴史資料館であり、多田銀銅山の奈良時代開鉱から昭和48年閉山までの資料が多数収められていた。ここで多くのことを学んだ。

多田銀銅山の範囲は広く、東西12km、南北10kmに主な鉱脈があった。主な鉱山は多田以外にも、猪名川町民田(たみだ)千軒や川西市国崎にも多くの坑道があった。当時の坑道は間歩(まぶ)と呼ばれ、手掘りであった。

多田から民田千軒まで約7km、内馬場はその中間に位置している。地質構成では、東部は丹波帯と超丹波帯の堆積岩類、西部は火山岩類で、有馬層群である。多田は火山岩類、内馬場・民田は堆積岩類である。

採鉱地には、間歩が複数あるといわれる。当時の地図には鉱山跡(×印)が内馬場にも載っていた。

このことから、今回採取した鉱物は近くの間歩から産出したズリ石（廃棄された石）に由来すると考えられる。また、多田銀銅山は熱水性鉱脈の多金属鉱床で銀（Ag）、銅（Cu）以外にも亜鉛（Zn）、鉛（Pb）も産出しているので、亜鉛鉱物、鉛鉱物の採取が期待できる。内馬場鉱山の近隣に民田鉱山跡（印）も地図に載っているので、この鉱山の間歩の探索も楽しみである。今後のフィールドワークでは多くのロマンが待っていて、大きな成果が期待できる。

6. まとめ

猪名川町内馬場で、石英、水晶、銅二次鉱物、その他の銅鉱物などを採集した。また、内馬場が多田銀銅山と深い関連があることを知った。

謝辞

人博の生野先生には、鉱物の同定、校閲でたいへんお世話になった。紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

参考文献

中村威・先山徹(1995)兵庫県下の鉱物資源、人と自然、No6:197-243 兵庫県立人と自然の博物館

(図1)



(写真1の矢印)



(写真2)



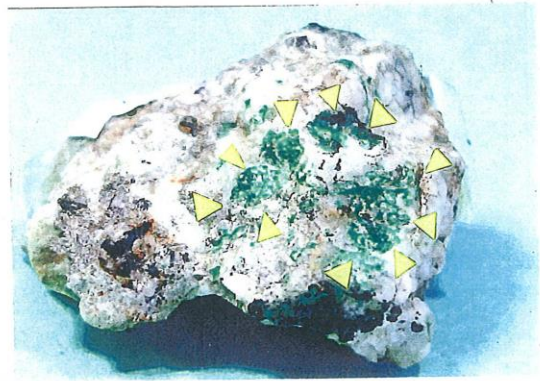
(写真3)



(写真4)



(写真5)



(写真6)



(写真7)

